

研究論文

心理職の開業経験とレジリエンス

— Yさんのライフヒストリーから —

日 高 直 保

安 立 奈 央

問題と目的

1. 心理職の開業について

心理的問題の重要性が認知されるようになった現在では、医療や福祉、教育といった分野をはじめとし、心理職が活躍する領域が広がりを見せている(川瀬・松本・松本、2015)。

そして、心理職が行う支援活動の特徴の一つとして、開業という形での臨床活動が挙げられる(日本臨床心理士資格認定協会HPより)。臨床心理士であるか否かを問わず、心理職が個人で開業し、カウンセリングをはじめとした実践を行うことは、心理職が社会の中で生きていく上での一つの可能性といえるだろう。

では、心理職が開業する経験とはどのようなものであろうか。心理職の開業経験について、その内実を論じた研究は少ない。先行研究としては、渡辺・亀井・小泉(編、2012)に納められた論考や、信田(2002)の論文が挙げられる。自らの開業経験について述べた信田(2002)は、カウンセリング機関の立ち上げは新しい経験の連続であり、自らの依って立つ理論的基盤の変化を生じさせたと記している。また、自らが個人相談室を開室した経験について述べられた亀井(2012)では、心理職の起業が個人相談室の開室といった形をとった場合、法的リスクや経済的なリスクを抱えうることや、起業に至るまでの経験を大きく反映させる形で、独自の臨床スタイルを確立していく様子が記述されている。

それでは、様々なリスクが想定される中でも、心理職に開業を実現させる要因や、開業の継続を支える要因はどのようなものでありうるのだろうか。亀

井(2012)は、技能の稚拙さといった、臨床活動を行う上での障壁を越えるために開業を決意した経緯や、心理職を山岳ガイドに例えながら、臨床活動を続けるポイントについて記述している。しかしながら、心理職に開業を実現させる要因や開業の継続を支える要因は、亀井(2012)による指摘以外にも、さまざまなものがありうるだろう。

心理職の開業経験を記述することは、開業を目指す心理職従事者にとって参考となる(信田、2002)だけでなく、現代社会において心理職として生きていく上での、一つの可能性を具体的に示すことにも結びつくと考えられる。そして、心理職に開業を実現させる要因や、開業の継続を支える要因を示すことも、心理職が自身のライフプランを考える上での参考となるだろう。また、心理職の開業経験については先行研究が少ないため、その経験の内実や、上記の要因について論じることそのものが、先行研究の間隙を埋める意義を有するといえよう。

そこで本研究では、臨床心理士として開業した女性にインタビューを行い、その経験をライフヒストリーとして提示する。ライフヒストリーの作成を通じ、心理士の開業経験がどのようなものとなりうるかを記述するとともに、作成されたライフヒストリーをもとに、心理職に開業を実現させる要因や、開業の継続を支える要因について考察していく。

一点、言葉の用い方について注釈しておきたい。心理職という言葉は複数性を含意しているので、本研究において心理職に就く個人を指すときは、心理士という言葉を用いる。

2. レジリエンスについて

また本研究では、記述された経験をふまえ、レジリエンスという概念をもとに、開業した心理士が発揮していた力について論じたい。レジリエンスという論点は、研究を始める前からあらかじめ想定されていたものではない。心理士の開業経験について聴取し、得られた語りをライフヒストリーとしてまとめていく過程の中で、その経験から個人のレジリエンスを読み取る可能性が見出されたのである。

「レジリエンスとは、大きな脅威や深刻な逆境に晒された際、個人が発揮する力や個人の適応に結びつく要因、良好な適応を達成するプロセスなど（日高、2021）」を指す概念である。本研究では、レジリエンス概念における、危機に際し発揮され個人を支える力という側面に注目し、開業した心理士のレジリエンスを記述したい。開業した心理士のレジリエンスを論じることで、開業の実現とその継続を可能にする要因についても、個人の経験をもとに検討することが可能になるだろう。

方法

1. 調査協力者

4年ほど前に臨床心理士として開業した、30代の女性1名（以下、Yさんと表記）を対象とした。

2. 調査・研究方法

1対1の半構造化インタビューを行った。インタビュー時間は1時間半ほど、全1回であり、プライバシーが守られる環境で行われた。インタビューでは、「開業に至る経緯や開業後の経験、開業して苦労したことなどを、自由に語ってください」という問いを皮切りに、Aさんの経験を通時的に聴取した。

インタビュアーとインタビューの関係性により、語られる内容も変化する（小林、1995）。インタビューと面識があることにより、インタビューがスムーズなものとなる可能性を考え、インタビューはYさんと交流のあった安立が担当し、その後のデータ分析と原稿の執筆を、ライフヒストリー研究の経

験を有する日高が担当した。完成した原稿は、発表前にYさんに渡し、記述の誤りや発表を希望しない点が無いかなどの確認を行った。

3. 倫理的配慮

研究協力に際し、仁愛大学研究倫理委員会より承認を得た。また、インタビューに際しては、調査協力者に「調査協力をお願い」および「同意書」の書面を用いて研究内容の説明を行い、面接内容の録音、記録も含めて同意を得た。加えて、インタビューの途中でも中止が可能であることを十分に説明し、研究の途中で協力を中止した場合でも、不利益を被ることは無いことを保証した。

4. 分析方法

本研究では、小林（1995）によるライフヒストリー法に基づき、Yさんの語りからライフヒストリーを作成した。ライフヒストリーとは、個人の語りを、語りに含まれる時間の流れに注目し、編集したものを意味する。ライフヒストリーの作成は、他者にも理解できるよう、個人の語りを時系列にそってまとめながら、語りに含まれる様々な意義を解釈する、という手順でなされる。

以上の方法をもとに、Yさんの語りを、開業を決意する段階から今に至るまでの経験としてまとめた。具体的には、はじめにYさんの語りを繰り返し読み、その内容を把握した。次いで、語りにおいてキーワードとなっていた言葉や、主たるイベント、および語りの特徴に注目しながら、Yさんの語りを時系列に沿ってまとめた。

また本研究では、語りの内容に加え、Yさんの語りにみられる特徴にも注目した。個人特有の言葉の使用法、繰り返し用いられる単語や口ぐせといった語りの特徴に注目し、その意味を分析することで、語られた行為や経験の時間・空間構造やその成り立ちといった、個人の経験の特徴を描き出すことが可能である（村上、2013；2016）。本研究でも、ライフヒストリーの作成に際し選び出された語りを中心

に語りの特徴を分析し、Yさんの経験の特徴を描き出すことで、ライフストーリーの記述を厚くすることを試みた。

分析結果

以下の記述において、「」が付けられた語句や語りは全てYさんの語りからの抜粋であり、重要な語りには下線を引き、語りにおいてキーワードとなっている言葉を四角で囲った。加えて、語りの省略や補足説明を加えた場合は[]内に記載し、インタビューの発話はAで示した。

1. 開業までの経緯

Yさんは、臨床心理士として開業した30歳代の女性である。本稿では、インタビューの語りをもとに、Yさんの開業経験について記述していく。インタビューでは、「場所」や「ところ」といった、場所を表現する言葉が最も多く用いられていた。Yさんにとって開業とは、自身が思い描く実践を可能にする場所を生み出して行くことなのだとはいえよう。では、Yさんにおける開業経験の内実は、どのようなものであったのだろうか。

まずは、Yさんが開業するきっかけとなった出来事について述べていく。

Y：開業したのが、ちょうど4年前になるのかな〔中略〕その時勤めていた〔中略〕病院の子ども部門がなくなっちゃって、で、みてた子たちの、うんと、その後みてもらえるところが見つからなくて。

Yさんが開業を決意したのは、今から4年ほど前にさかのぼる。この時、Yさんの勤務する病院の「子ども部門」が突然の廃止となった。Yさんは、この「子ども部門」に臨床心理士として勤務し、主に発達的な特徴を持つ子どもたちの療育を担当していた。しかしながら、「子ども部門」が廃止となり、Yさんは自身の実践を続ける場所を奪われてしまう。

それに加え、Yさんが担当していた子どもたちをサポートする他機関も見つからず、「何十人も宙吊りになっちゃう」事態が発生することとなった。Yさんは、二重の意味で場所の喪失を経験している。ただ、「子ども部門」の廃止がもたらした何よりの問題は、「みてた子たちの〔中略〕その後〔を〕みてもらえるところ」の不在、言い換えれば、Yさんが担当していた子どもたちを引き受ける場所の不在だったのであろう。

このような事態に直面したYさんの思いは、以下のようなものであった。

Y：12月の時点で〔「子ども部門」の存続が〕3月までだって言われたのかな。3月までって言われて、で、なんか自分が仕事している中で、一週間でも間が空くと変わっちゃうなっていう感じがあって、例えば自閉症の子とか、なんかこう、一週間空いただけでもすごく変わっちゃうから、これ、3月で終わりになって、もし自分でやるなら、すぐやりたいと思ってて。もう間があかないように、なんとかやるなら、そうやりたいっていう気持ちもあったりして、なんかごちゃごちゃして、責任があるじゃないですかこの子に対して、私、開業してやってくると、すごい責任もあるし、他の施設に行くと他のスタッフさんにみてもらうこともいいのかなってその子にとっちゃメリットかなとも思ったし、なんかすごい悩んで、覚悟が決まるのに、覚悟が決まるのにものすごい時間がかかってて。

上記の語りの前半部分からは、Yさんが実践の時間的連続性を重視している様子がうかがえる。「一週間でも間が空くと変わっちゃう」という感覚があったため、Yさん個人で開業し実践を続けるならば、「すぐやりたい」という思いがあった。

しかしながら、Yさんの「覚悟が決まる」のには「ものすごい時間〔インタビューの別箇所では、「1ヶ月半くらい」と語られた〕」を要した。その背景に

については、「なんかごちゃごちゃして」と語られている。ここで語られている「ごちゃごちゃ」とは、個人開業という形で子どもたちの担当を続けることに対する責任の実感や、他施設や他スタッフとの出会いも子どもたちにとってメリットになりうるのではないかという可能性の意識の存在を指すのだろう。「～し」という語尾と共に、責任とメリットについて連続的に語られていることは、これらの思いが重層的にYさんにのしかかり、決断を躊躇させていた様子を表すと推察される。

また、Yさんの語りにもみられる特徴の一つとして、「なんか」の用いられ方が挙げられる。「なんか」という言葉は、Yさんにとって漠然としたものであるが、Yさんを動かす重要な要因について言及される際に用いられることが多い。上記の語りでも、Yさんが抱いた「感じ」や、「ごちゃごちゃ」した思いや悩みなど、漠然としているが、Yさんを考えさせた重要な要因について言及する際、「なんか」が用いられている。

それでは、Yさんに開業を決意させた要因はなんであったのだろうか。

A:最終的には何が〔開業を決意する〕決め手だったの？

Y: 誰も、やらないってことかな。誰も、誰もその子たちの、今のこの、大事な時間っていうのを、なんだろう、誰も引き受けないっていうのかなんていうのかな、よくわかんないけど、なんていうかこの病院でやってもらえますかって言っても、こっちの病院もいっぱいだから無理ですみたいな回答とか、あの、私が勤めている病院のその子ども部門がなくなっちゃって、何十人も宙づりになっちゃう、宙ぶらりんになっちゃうので、地域で会議みたいなのもやったのね〔中略〕で、これくらいの人たちが困ってしまうので、どうかしたいって、したいから協力してくださいみたいな話になっているんだけど、じゃここで引き受けますみたいな回答が、いなくて、みんないっぱい

いっぱいやってて、困るなー、みたいな感じで〔中略〕

A:なんかそういう会議とか経ていく中で徐々に決意が固まっていったって感じ

Y: そうだね、そうだね、覚悟が。誰もやらない、やってくれない、やれない、状況的にね、やれないとかやらないとかっていう状況なんだなっていう、うーん、なんか、決め手かな。だんだんこう、どこもないんだなっていう。

開業を決意した決め手についてYさんは、「誰も、やらないってことかな」と第一に返答している。「子ども部門」の廃止に伴い、子どもたちの今後をどうするかを検討する会議が行われたが、Yさんが直面したのは「〔誰も〕やれないとかやらないとかっていう状況」であった。時間的に連続した実践を行うことが重要であるにもかかわらず、「今のこの、大事な時間」を「誰も引き受けない」という状況にYさんは直面する。ここでも「なんか」が用いられおり、周囲が「やれない」のか「やらない」のかははっきりせず、担当していた子どもたちの引き受け先があるか否かも判然としない状況そのものが、Yさんを動かす重要な要因となり、Yさんを開業へと向かわせたのだらうと推察される。

そして、開業に向け決意を固める様子を語った上記の引用は、Yさんがみていた子どもたちの今後をサポートする機関が「どこもない」という、場所の不在への言及で締めくくられている。Yさんの語りは、場所に関する言葉が頻出することは既に述べたが、Yさんが開業を決意した大きな要因が、「〔子どもたちの〕その後みてもらえるところ」が「どこもない」という場所の不在だったのであろう。子どもたちの引き受け先が「どこにもない」という点が「だんだん」はっきりとしていく中で、Yさんは開業への決意を固めていったと推察される。

加えて、開業を後押ししたもう一つの要因についても語られた。

Y: で、やっぱりね、決め手のもう一つは旦那さんだと思う。私もいろんな仕事の話をして旦那にしたから、えっと、私がどんな仕事をしててっていうのもよく分かってて、旦那がね。旦那も福祉施設で同じ発達系の福祉施設で働いているから、えっと、私がやっていることが他でやれない、やれていないってこともよくわかってて〔中略〕で、えーっと、こどもの精神科がなくなっちゃうっていうときに、っていうふうに決まったときに、じゃ、やった方が良くって言って、迷いなく言ってくれたのもひとつ大きなきっかけかもしれない。覚悟が決まっちゃったきっかけ

A: それがおおきかったんだね

Y: で、あの、協力してくれてた。あの、開業するのに、どことこの場所がいーらしいとかちょっと大きめらしいよとか。こことここがあるらしいんだけど半分電話かけてくれるとか。

Yさんが開業の覚悟を決めた背景には、「旦那さん」からの後押しがあった。Yさんの「旦那さん」は、職種は違うが福祉施設で働いており、Yさんが行う実践の固有性を理解した上で、「やった方が良く」と声をかけてくれたのである。

上記の語りは、前ページの引用と連続した語りである。「誰もやらない、やってくれない、やれない」という錯綜した状況の中でも、Yさんと「旦那さん」は、「私がやっていることが他でやれない、やれていない」ことにはっきり気づいている。Yさんは、自らの実践の独自性と、代替不可能性に気づいているのである。そして、そのような状況下であったからこそ、「やった方が良く」という声かけが、Yさん独自の実践を、開業という形で続けていくことを大きく後押ししたのであろう。子どもたちの引き受け先についての漠然とした状況そのものがYさんを開業へと向かわせるが、開業に踏み切る背景には、自身の実践の独自性への気づきと、迷いを突破させる周囲からの協力が存在したといえよう。判断としない状況の中で、場所の不在や実践の独自性な

どはっきりと自覚できる事柄に気づき、周囲からの協力も得ていく中で、Yさんは開業へと向かっていく。

そして、「旦那さん」からの協力として語られているのが、「場所」に関する話題である。協力に関する話題として真っ先に「場所」について語られる流れから、Yさんにとっての「場所」の重要性がうかがえよう。そして、「場所」を重視するYさんの語りは、実践の時間的、空間的連続性を重視するYさんの考えを示してもいると推察される。Yさんは臨床心理士であるが、療育的な実践を行っていたため、「小体育館くらい」の空間を必要としていた。その点でも、「場所」の確保はYさんにとって大きな課題となる。Yさんにとって「場所」とは、時空間的な連続性を担保して自らの実践を続けられる場であり、「宙ぶらりん」になってしまった子どもたちの引き受け先でもあり、そしてある程度の広さが確保された物理的な空間でもあるといえよう。

地域の状況や、家族からの協力があり、Yさんは開業することとなる。インタビューにおいて、開業に向けた手続きの様子などは極めて簡潔に語られるにとどまった。Yさんにとって重要であったのは、なによりも「場所」の確保であったのだろう。そして、「ほんとタイミングよく、使っていていいですよってしてくれるところがあった」ため、Yさんは個人開業する形で、実践を続けることになったと話された。この時、もともとYさんが勤務していた病院に比べ、料金がかなり高くなる状況となったが、それでも、「半分弱くらいの子どもの来てくれる」結果となっていた。

2. 水害による「場所」の喪失

引き続きインタビューにおいて、開業後の様子について尋ねると、Yさんの第一声は以下のようなものであった。

A: やってみてどんなことがあった?

Y: えっとね、1年目、4月から始めて、10月あ

たりで〔水害があり〕浸水しちゃったの。で、その場所が使えなくなっちゃったの。

Yさんが自身の実践を行える「場所」が、再び奪われてしまう。病院の「子ども部門」の廃止に続き、「場所」の喪失という状況が反復する。開業後の経験について尋ねた質問に対し、第一に上記の内容が語られていることから、「場所」の喪失がYさんにとって大きなインパクトをもたらした様子がうかがえる。

この時の様子について、Yさんは以下のように語った。

Y：そう。ずーっとコンスタントに続けていくって言うのが大事かなってずっと思ってたから。できるだけあいだあげないでいきたいって思ってたんだけど。さすがに心萎えて。さすがにね〔中略〕なんか、やっと見つけた場所だったんだよね、そこが。探した場所が。で、ほかないよなーって思ってた。そしたらね、〔Yさんが勤務していた病院の〕上司だったドクターの奥さんから連絡が来て、奥様から連絡が来て、Yさん大丈夫だった？って連絡が来て、でも場所無くて心折れてますって言ったんだけど、借りれる場所なんてないんじゃないかな、みたいな感じで心折れてるって言ったら、奥さんが、ここだったらあいてるし使わせてもらえるみたいって情報くれて。それがね、隣の市の公民館。公民館の一室で、わりとちょっと大きい部屋があって、だからここに電話してみたらいいって言ってくれて。

「ずーっとコンスタントに続けていく」という実践の連続性を重視していたYさんであるが、水害による「場所」の喪失には、「さすがに心萎えて」しまったと話す。上記の語りでは、「場所」という言葉が頻出しており、「場所」に対するYさんの思いの強さがうかがえる。水害は、「やっと見つけた場所」をYさんから奪う結果となり、Yさんの心を「萎え

させる。

そして、この時転機となったのが、「上司だったドクターの奥さん」からの連絡である。「ドクターの奥さん」に「場所無くて心折れてます」と状況を伝えたとこ、「隣の市の公民館」を紹介してくれたのだ。保健師でもあった「ドクターの奥さん」は、Yさんがどのような実践を行っているのか「全部わかってる人」であり、「間隔空けない方が良い」という時間的連続性の大切さも理解してくれていたとYさんは語る。そのため、「場所」の確保に尽力してくれ、紹介された公民館でYさんは実践を再開することとなる。

Yさんが実践を行う「場所」は、Yさんの行動だけでもたらされるわけではない。もちろんYさんの尽力も存在するが、家族や勤務先の人脈といった、Yさんが培ってきた人とのつながりの中で「場所」がもたらされていくのである。この点も、Yさんの経験における重要なポイントであろう。

3. 新しい「場所」での再開

「公民館の一室」で、自身の実践を「またすぐ再開」したYさんであるが、この場所には問題も存在した。公民館という場所の性質上、Yさんが療育で用いる道具を常に置いておくことができなかったのである。そのため、マットや跳び箱といった道具を、「一回づつ持ってきて車に積んで、行って、やり終わったら積みなおして帰ってくる」という状況が続くこととなった。このような状況下でYさんは、「これずっと続けてらんない、って思ってた。なんかどっか定住できるところ探さなきゃって」と感じるようになる。「定住」という言葉は、恒常的に使用できる「場所」の確保を目指すYさんの思いを端的に表したものである。

そのような状況下でYさんは新しい「場所」を探し始めるのであるが、この時Yさんの力となってくれた人物が存在する。Yさんは、開業に際し支援金を受け取っていたのであるが、支援金とともに、「経営に対する伴走支援」も受けられることとなり、そ

の担当となった人物がYさんをサポートしたのである。開業に向けた手続きを語る際、この支援金については語られなかったが、「場所」の確保という話題に連動して、「言い忘れた」と支援金とサポーターの存在が語られた。Yさんの語りにおいてテーマとなっているのは、やはり「場所」であるといえよう。その時の様子を、Yさんは以下のように語った。

Y：その人〔「経営に対する伴走支援」におけるYさんの担当者〕はずっと伴走してくれて。で、災害が起きて、場所借りれなくなっちゃったってこととかも報告してて、それで今新しい場所を探してるって言ったら〔中略〕色んなこと知っている人を紹介してくれたんだよ、その伴走してくれる人が。何ていうとこだったか忘れちゃったな。

A：そういう、団体？

Y：団体、公的な団体〔中略〕その人に紹介してくれて、こういう、こうこうこういうことやって、このくらいの場所が欲しい、貸してくれるとこ探してるって言って。災害が起きたって言って、公民館借りながら新たな場所を探してる時にその人に会いに行って、そしたら、ここの場所があいてるはずだから、ここの、今借りてるところがね、公会堂なんだけど〔中略〕2階が小体育館になってるって言って〔中略〕それで教えてもらって、教えてもらったその足で、その町の区長さんかな、区長さんに頼みに行って。

「伴走してくれる人」は、Yさんを「公的な団体」に紹介する。ここでは、Yさんが培ってきた人とのつながりが新たなつながりを生じさせ、それに連動する形でYさんが望む「場所」がもたらされている。つながりの中で「場所」がもたらされるという構図も、Yさんの経験において繰り返されている。

公会堂の存在を知らされたYさんは、「教えてもらったその足で、その町の区長さん」に公会堂の使用について頼みに行くこととなった。Yさんは、こ

れまで培ってきた人とのつながりを基に、会いに行く、頼みに行くといった行動を起こし、そのつながりを拡大させていく。そして、それらのつながりが「場所」へと結実していくのである。

「区長さん」も進んで協力を申し出てくれたのであるが、実際に公会堂が使用できるようになったのは、Yさんの申し出から半年ほど経った後であったと言う。そして、公会堂の使用許可は、意外な形でYさんにもたらされることとなった。

Y：なかなか連絡来ない感じで。そしたら、ある日、市役所の、病院にいる頃からやり取りがあった家庭相談員さんみたいな人から連絡があって、Yさん場所探してるんだって？って言って。その人に言ってなかったんだよ

A：なんで知ってんだろ。まわりまわって？

Y：そう。なんで知ってんだろって。何か町の区長さんが借りて〔中略〕市から借りてたんだよ

A：あー、〔公会堂は〕元々、市のものなんだ

Y：市のものなんだよ。だから、市に貸してもいいですかって問い合わせしてくれたみたいで。で、なんかこうこうこういうことやっている人らしいんだけど、家庭相談員さん知ってる？って話がいったみたいで、知ってる知ってる、ってなって。そしたら、よく病院の時とかも一緒にやり取りしてくださった方ですみたいに言ってくれて、で許可が下りて。それで借りれるようになって。

「病院にいる頃からやり取りがあった家庭相談員さん」から、突然の連絡がYさんにもたらされた。Yさんが使用を願い出た公会堂は、「区長さん」が市から借りているものであり、「区長さん」が市へ使用許可について問い合わせた際、その話が「家庭相談員さん」の耳に入り、Yさんが「場所」を探していると知ることになったのである。

Yさんが培ってきた人とのつながりと、開業後に作り出した新しいつながりが、Yさんの知らないところで交差する。そして、「よく病院の時とかも一

緒にやり取りしてくださった方です」と「家庭相談員さん」も後押ししてくれる形で、公会堂の使用許可が降りることとなっている。人とのつながりが結びつく中で「場所」がもたらされるという構図は、ここでも一貫しているといえよう。

そして、新しい場所である公会堂について、Yさんは以下のように思いを語った。

Y: ここ〔公会堂〕ならちょっと定住できるかなって思って。その町の区長さんとかにお願いするときに、もうずーっと貸してもらいたって言って。ずーっと貸してもらいたいです！って言って。それ前提でお願いして、オッケーが下りたら、ここだったらしばらくいいかなってことで週2日に。

ここでも、「定住」という言葉とともに、Yさんの思いが語られている。「定住」とは、「ずーっと」という時間的連続性の維持が可能な「場所」を確保し、実践を行っていくことであろう。「場所」の時空間的連続性が、Yさんの実践における基盤となる。

そして、「場所」の確保の実現は、週1日であった開業日が週2日になるという、実践の広がりももたらしている。Yさんは、現在に至るまでの1年半ほど、公会堂にて週2日の開業を続けている。

4. つながり を 基 に し た 実 践 の 広 が り

Yさんのインタビューでは、開業に際する経験と水害の経験、そして公会堂という、「定住」できる新しい「場所」を見出す経験が主に語られていた。そして、それらの話題に続けて語られた内容が、人とのつながりがAさんの実践に広がりをもたらすという話題である。

A: 子どもたちは、どっか経由で申し込みがあるの？

Y: えっとね、ドクターから、あの、私のところをお願いってくる子もいるし、さっき話した家

庭相談員さんから、Yさんこういう子がいて、今ちょっと困っているんだけどみたいな感じで〔中略〕家庭相談員さんだから保育園とか様子見に行ったりして。で、なんかこう、療育受けたいんだけど、とても月一じゃ間に合わない気がする、みたいな子とか。あの、近くの病院は月一でやってるけど、月一じゃ無理な気がする子とかが、私のところに回してくれたりとか。

Yさんのもとには、「ドクター」や、「病院にいる頃からやり取りがあった家庭相談員さん」からの紹介で、申し込みがなされる。Yさんが培ってきた人とのつながりを基に、Yさんの開業実践が成り立っている様子がうかがえる。

しかし、Yさんはただ紹介を待っているわけではない。自らも地域で行われる会議に出席するなどし、つながりを維持し続けている。そして、そのつながりの中で、Yさんの作り出す「場所」が充実していく。

Y: なんかこの間もね、あの、病院にいた時から来てる子の、通ってる保育園に様子を見に行って、保育園の先生にどういうところで困るかとか、どういったところで不応になるかとか、こう支援会議とかにも参加させてもらったりしてたの、病院にいる時から。いる時から。そういうつながりで、Yさんがこういうことやってるっていうのを結構保育園の先生たちが知ってくれて。で、なんかねこの間一つの保育園が閉園になっちゃったの。で、なんか、閉園になっちゃうといろんな遊具とか跳び箱とかマットとかね、あの、いらなくなるでしょ。そしたらね、その保育園の園長先生が、Yさんこういうのがあるけど使うって連絡くださって。

上記の語りからは、「病院にいた時から来てる子」へのYさんの支援のあり方や、その子への支援を通じてさまざまなつながりが生まれる様子、そして、そこで生み出されたつながりが、Yさんの開業実践

を充実させていく様子が見えてくる。細かく見ていきたい。

Yさんは、「病院にいる時から」、自身の担当する子どもに関する支援会議等に参加を続けている。「いる時から」という言葉が重ねて用いられていることは、時間的な連続性を重視するYさんの実践の特徴を示すものといえよう。そしてYさんの実践が、開業したその「場所」での関わりにとどまるわけではないことも重要な点であろう。保育園に様子を見に行き会議に参加するという形で、その子の日常生活を支えることもYさんは試みている。Yさんの実践では、開業するその「場所」の時空間的な連続性だけでなく、自身が開業する「場所」と日常生活のつながりという形で、実践と生活との時空間的な連続性も意識されているのである。

そして、「病院にいた時から来てる子」の支援のため他機関と協働することは、保育士とのつながりをYさんにもたらす。さらに、会議への参加を続けることは、そのつながりを維持することも可能にするのであり、自身が「こういうことやってる」と保育士たちに知ってもらい機会ともなる。おそらく、このようなつながりの中でYさんの実践が周知されていくことは、子どもの紹介という形で、Yさんの開業実践を充実させるのであろう。協働の中で築き上げられた人とのつながりと、開業実践の充実との間の結びつきが、はっきりとYさんに認識されているわけではないのかもしれない。そのため、ここでも漠然性を示す「なんか」という言葉が用いられながら、人とのつながりが、Yさんの実践の場を動かす、言い換えれば変化させる要因として言及されていると推察される。

さらに、そのようなつながりは、Yさんの開業する「場所」を物質的に充実させるだけでなく、Yさん自身の心を動かすことにも結びついている。自身の実践が周知されていることで、閉園になった保育園の園長から、「Yさんこういうのがあるけど使おうって連絡」が来るのである。遊具は「買ったら50万くらいする」高額なものであるため、それらをもらえ

ることは「めっちゃありがたかった」とYさんは話す。

Y：もう、めっちゃありがたかったね。ほんとに。なんかその、思い出してくれて、使っていていよって言うてくれて、ていう、そのなんていうのかな、気持ちがめちゃくちゃありがたかったね。うん、そうそう。あの、つながりはけっこう病院の時からあって。それにめちゃくちゃ救われてる。

高額な遊具をもらえるということは、「場所」を物理的に充実させるという点でも「助かる」のであるが、それだけではない。Yさんのことを「思い出して」くれたこと、そして「使っていていよ」といつてくれたこと、さらにその背後にあるその人の「気持ちがめちゃくちゃありがたかった」と語られている。園長がYさんを「思い出してくれ」た原因が、はっきりとしているわけではないのだろう。そのために、「なんか」という漠然とした感覚を持ちつつ、Yさんは心動かされている。

人とのつながりは、Yさんの実践の場を充実させるだけでなく、Yさんのつながっている相手の「気持ち」を感じさせてくれるという点においても、Yさんを救っている。つながりは、個人での開業実践を行うYさんを、気持ちの面でも支えているのであろう。

考察

Yさんは、自らが実践を行う「場所」の喪失という危機に繰り返し直面する中、開業を決意し、実践をやり続けている。時には「心折れてる」と感じられることがありながらも、Yさんは新たな「場所」を見出し、実践を再スタートさせていた。まさにYさんは、開業に際し繰り返される危機の中で、自身のレジリエンスを発揮し、心理職として働き続けているといえよう。本章では、Yさんのレジリエンスの内実を示しながら、Yさんに開業を実現、維持させている要因について検討していきたい。

1. 責任を引き受け行為する力

Yさんは、開業への経緯を語る際、「すごい責任あるし」と、開業後に自身が引き受けることとなる「責任」の大きさが、開業するか否か悩む一因であったことを語っていた。一方で、Yさんはこの「責任」を引き受け、開業するに至っている。ここで注目したいのは、Yさんがこの「責任」を引き受けた背景である。おそらくここでは、二重の意味での責任の引き受けがなされていると考えられる。

第一に、引き受け先がない子ども達を放棄しない、という意味での責任である。Yさんは、自身が担当する子ども達の「みてもらえるところ」を探すために尽力し、その場所が無いことが判明する中で、開業を決意していた。自身のクライアントを放棄しないという臨床家としての責任感が、Yさんの開業に結びついているのであろう。これが、Yさんが引き受けた責任の第一の意味である。

第二の意味が、病院という組織を離れ、個人で開業することに伴う「責任」である。こちらの「責任」が、インタビューにおいて主に言及されていたものであろう。亀井（2012）が指摘するように、個人での開業は、法的リスクや経済的リスクなど、様々なリスクを抱えうる。このリスクは、「責任」とも言い換えうるものであろう。クライアントや開業の場にしたトラブルを、Yさん個人で引き受けていかなければならないというリスク、および「責任」がある。おそらくYさんは、これら二重の意味での責任を引き受け、開業に至っている。さらに言えば、Yさんの中に、クライアントを放棄しないという臨床家としての責任感があったからこそ、個人で開業することに伴う「責任」を引き受ける覚悟も生まれたのではないだろうか。

そして、責任を引き受け行為する力は、Yさんのレジリエンスであると考えられる。利他的な価値観を持ち、それを実践できることは、危機において個人を支えるレジリエンスになりうる（Southwick & Charney, 2012/2015）。Yさんの経験では、臨床家としての責任というYさんにとっての価値が、「場

所」の喪失という危機においてYさんを動かしたのであろう。さらに、開業という形で自らの価値観に基づく行動を起こしたことも、Yさんの力であるといえよう。自身の価値観をもとに行動する力が発揮されたことにより、Yさんは「場所」の喪失という度重なる危機を乗り越え、現在でも心理士として実践を続けられていると考えられる。本研究では、インタビューにおいて用いられていた言葉を尊重し、以上の力を〈責任を引き受け行為する力〉と表現したい。

2. 人とつながる力

続いて指摘したいのは、Yさんにおける〈人とつながる力〉である。他者との関わりを好み、コミュニケーションをとれることは、周囲の協力を得ながら危機を乗り越えることを可能にするレジリエンス要因である（平野、2010）。Yさんの経験においても、周囲からの協力は、開業を決意、維持する上で大きな支えになっている様子であった。そして、周囲からの協力が生じた背景には、他者とコミュニケーションを取り、つながりを生み出していくYさんの力が存在すると考えられる。本研究では、この力を〈人とつながる力〉と表現したい。

Yさんにおいて、〈人とつながる力〉は、〈責任を引き受け行為する力〉と密接に結びついているだろう。インタビューにおいては、自らの実践の時空間的連続性を重視し、自身の担当している子どもの「支援会議」などに参加し続ける中で、人とのつながりが生み出されている様子が描き出されていた。自らの価値観、言い換えれば臨床観と、それを守ろうとする責任感、そして実際に行動する力が発揮される中で、Yさんは人とのつながりを生み出し、今に至っているのであろう。二つの力が結実する形で、開業を実現し、維持することが可能になっていると考えられる。

3. 開業の実現とその継続を可能にする要因

続いて、Yさんの経験において、開業を実現させ、

それを維持することを可能にした要因についても検討したい。前述したレジリエンスの記述と重なる部分もあるが、本研究の目的に鑑み、改めて考察を行う。

Yさんが開業を決意し、それを実現させる上で大きな影響を及ぼした要因は、自身の臨床観と、それに伴う責任感であろう。自身の臨床活動においては時空間的な連続性が重要であるという考えと、自身のクライアントを放棄しないという責任感の存在は、Yさんが独自の実践を開業という形で続ける選択を行う上で、必要不可欠な要因であったと考えられる。さらに、それらの要因を実行に移す力、すなわち〈責任を引き受け行為する力〉がYさんに備わっていたことも、開業の実現および継続において重要な要因となっているのであろう。

そして、周囲からの協力が存在したことも、開業の実現とその継続を可能にする要因といえよう。「旦那さん」からの協力が開業への大きな後押しとなっただけでなく、人とのつながりの中で、Yさんが実践を行う「場所」とその充実がもたらされていた。人とのつながり、およびそこから生じる協力は、開業の実現を可能にした要因であるだけでなく、Yさんが開業を継続する上での支えでもあり続けていると考えられる。さらに、人とのつながりは、「めっちゃくちや救われてる」という形でYさんの気持ちを支えてもいるだろう。〈人とつながる力〉がもたらすつながりや協力も、開業の実現および継続において重要な要因であると考えられる。

Yさんが有したレジリエンスと、開業の実現、およびその継続を可能にする要因は、密接に結びつくものであろう。Yさんが〈責任を引き受け行為する力〉と〈人とつながる力〉を有しているからこそ、開業の実現と継続が可能になっているとも考えられる。本節における考察は、Yさんの力が可能にする、開業を支える要因の内実を詳述したものであるといえよう。

4. まとめ

本研究を通じて、自らが実践を行う「場所」の喪

失という危機に繰り返し直面する中、開業を決意し、独自の実践を行い続けているYさんの姿が描き出された。Yさんにとって開業とは、喪った「場所」を取り戻す試みであり、人とのつながりの中で、「場所」の獲得が実現している様子がかがえた。また、Yさんにとっての「場所」とは、時空間的な連続性を担保して、自らの実践を行える場である。そして、「場所」は人とのつながりの中で獲得されると同時に、人とのつながりによって充実していると推察された。

そして、繰り返される危機を乗り越える中で発揮されたレジリエンスとして、〈責任を引き受け行為する力〉と〈人とつながる力〉の存在が挙げられた。また、開業の実現とその継続を可能にする要因として、Yさんの臨床観とそれに伴う責任感、および周囲からの協力の存在を指摘した。これらのレジリエンスおよび要因は、Yさんに限らず、心理士が開業する上でも、実践を支えるポイントになりうると考えられる。

引用文献

- 日高直保 (2021) 人間のレジリエンスとナラティブ。未来共創, 8, 69-83.
- 平野真理 (2010) レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み——二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成。パーソナリティ研究, 19(2), 94-106.
- 亀井敏彦 (2012) 私の開業心理療法：臨床心理士・亀井敏彦の仕事場より。渡辺雄三・亀井敏彦・小泉規実男 (編), 開業臨床心理士の仕事場, 49-69, 金剛出版。
- 川瀬正裕・松本真理子・松本英夫 (2015) 心とかかわる臨床心理：基礎・実際・方法 [第3版]。ナカニシヤ出版。
- 小林多寿子 (1995) インタビューからライフストーリーへ——語られた「人生」と構成された「人生」。中野 卓・桜井 厚 (編), ライフストーリーの社会学 (pp.43-70), 弘文堂。
- 村上靖彦 (2013) 摘便とお花見——看護の語りの現

象学. 医学書院.

村上靖彦 (2016) 仙人と妄想デートする——看護の現象学と自由の哲学. 人文書院.

信田さよ子 (2002) 開業カウンセラーというお仕事. アディクションと家族, 19(3), 333-339.

サウスウィック, S.M.& チャーニー, D.S. (2015) レジリエンス——人生の危機を乗り越えるための科学と10の処方箋 (森下 愛訳, 西 大輔・森下博文監訳). 岩崎学術出版社. (Southwick, S.M. & Charney, D.S. (2012) *Resilience: The Science of Mastering Life's Greatest Challenges*. Cambridge University Press.)